

ヘブライ語聖書に、 なぜユーモアが存在するのか？¹

ジョナサン・マゴネット
日原広志(訳)

「ヘブライ語聖書に、なぜユーモアが存在するのか？」というこの講演のタイトルが、もう既にヘブライ語聖書の中にはユーモアが存在していることを前提にしています。このことは一つの驚きとして迫って来るかも知れません。何と言っても聖書は宗教書であると普遍的に看做されており、それ故人々は聖書をきわめて真面目な書物であるに違いないと想定するからです。そして実際、宗教は真面目なものですが、また極めて人間的な関心事なのです。それ故、宗教は私達の経験の全局面を扱い、反映し、また表現しなければならず、ユーモアや時には人生の不条理をも含むこととなります。しかしユーモアを認識することは極めて個人の資質に左右される事柄でもあります。この講演のために背景的阅读を行う中で、私はたまたま英国の哲学者にして数学者であるアルフレッド・ノース・ホワイトヘッド (Alfred North Whitehead) による一つの言明と出くわして仰天しました。どうやら彼の見解は、彼が旧約聖書と呼んでいる本の中にはいかなるユーモアも存在しないというもののようです。彼は、「聖書にユーモアが完全に欠如していることは全文学中における最も特異な事の一つである」と述べています。どうやら彼はそれを、古代ユダヤ人は絶え間なく外国勢力による攻撃と蹂躪を浴びた自らの状況の故に「抑圧された陰鬱な

1 [訳注] これは2015年6月11日、西南学院大学大学博物館2階講堂で行われた大学学術研究所主催の公開講演である。原題は、Why is There Humour in the Hebrew Bible?

民」であったという理解に基づいて説明しているようです²。彼のイスラエル史についての分析は正しいかも知れませんが、失礼ながら、私は彼のユーモアを認識する能力には疑念を抱かずにはおれません。私は彼が英国国教会の牧師 (Minister) の息子であった事実が彼の見解に影響を与えているのではないかと思います。

それにも関わらず、この事はまさしく私達にヘブライ語聖書中のユーモアの存在を証明する必要性を示しています。この事は、〔翻訳で聖書を読む人々にはヘブライ語聖書の〕ユーモアは十分に伝わっていないという点で、第二の問題も提起しています³。私達が扱おうとしている種々の聖書本文は2千年以上前に全く異なった文化的環境の中で編纂されたものですから、私達はそれらをそれら自身の言語〔ヘブライ語〕と術語の中で理解しようと努める必要があります。その時私達はそれらをこの講演で英語という全く異なった文化的世界へと翻訳することの問題に、そして日本の言語と文化の中で、この特殊な講演が受容されるかという更なる難題に直面するのです。その上更に私は言っておきたいのですが、実際ヘブライ語聖書の中には見出されるに値する相当な量のユーモアが存在するので、講演時間内に提示できる分量だけに仕事を制限することも難題なのです。

〔ヨナ書におけるユーモア〕

まずはユーモアの意図があると思われる聖書の物語を数例言及することから始めるのがシンプルで良いでしょう。一つの明白な事例はヨナ書です。それはニネベの都の邪悪さを弾劾し、彼等の破滅を宣言すべく神に派遣された一人の預言者の物語です。ヨナは〔しかしニネベには〕行きたくありませんでした。あまりにも行きたくなかったため彼はこのミッションから逃れるために〔当時〕知られていた世界の反対側の果て〔タルシシュ〕まで行く船に乗り込む程

2 Cf. Hershey H. Friedman, 'Humour in the Hebrew Bible,' *Humor: International Journal of Humor Research* Vol. 13 : 3, Sept 2000, pp. 258-285, citing Lucien Price (ed.), *Dialogues of Alfred North Whitehead* (Boston: Little, Brown and Company, 1954), p. 199.

3 〔訳注〕以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

でした。神は嵐を送り、結局ヨナの責任は船乗り達全員の知るところとなり、自らリクエストしてヨナは海中へと投げ込まれます。彼の命は彼を呑み込んだ大魚によって救われます。3日の後、彼はようやく神に祈り、魚は彼を乾いた所に吐き出します。神はヨナに再び彼のミッションを思い出させねばなりませんでした。それから彼はニネベの都に入り、正確に5つの単語だけ告げ、〔都を〕一巡りして去ります⁴。しかしこれらの言葉は住民を、後には王さえも邪悪な行いから悔い改めさせるには十分であったようで、神は結局その都を滅ぼさないよう決心するのです。ヨナは怒り狂い、もう一度神に祈ります。

さて、この物語全編に亘って、ヨナを笑いのネタにするユーモアの要素がいくらかでも見つかります。第一に、聖書的約束事の逆転があります。何故なら、読み手が神に従順である筈と期待する当の預言者が試みるのは一結果的に大失敗するのですが一〔神のミッションから〕逃げることなのです。第二に、もう一つの逆転として、ヨナが遭遇する外国人登場人物である船乗り達やニネベの人々は、通例聖書的文脈においては悪役であると予想される面々ですが、結局いずれも善玉であることが判明します。私達は逆さまの (topsy-turvy) 世界を目の当たりにします。その後とはいうと、魚の腹の中でのヨナの祈りがあるのですが、それは単に神に向かって「あなたは、わたしを水の中へ投げ込み、それから引き上げられました。大いに感謝します」⁵と言うのみで、自らの不従順については全く何の言及もないのです。それどころか、彼の最終的な言葉は感謝の犠牲を献げるためにすぐに行くという (エルサレム神殿に帰ることだけを意味し得る〔ニネベには行かないという〕) 誓いです⁶。彼は最後に「救いは、

4 〔訳注〕ヨナ書3章4節の「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」はヘブライ語聖書本文では「オド アルバイム ヨム ヴェ・ニネヴェ ネフバヘト」と5つの単語から成る。なお以下、章句の引用は原則『聖書 新共同訳』による。しかし、ヘブライ語聖書のユーモアを扱う本講演の性格上、講演者のヘブライ語本文の英訳に負う所が大なので、新共同訳引用では醍醐味を味わえない箇所については、新共同訳は訳注にて参照させるに留めている。また登場人物の台詞も新共同訳完全引用でなくとも取って「」で表記した。

5 〔訳注〕ヨナ書2章2-10節参照。

6 〔訳注〕「わたしは感謝の声をあげ／いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。救いは、主にこそある。」(ヨナ書2:10)

主にこそある！」と揚々たる結語で締めくくります。魚が彼にうんざりして、彼を吐き出すのも無理はありません。道理で神が「ヨナよ、エルサレムではないぞ、ニネベだぞ！」と、ヨナに再度自分の仕事を思い出させねばならなかった筈です⁷。

ニネベは破壊を免れました。その時、一種のどうしようもない怒りの中で、ヨナは神に大声で「だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました！」⁸と叫びます。そしてその後、ある極端な文学的勇気を以て、〔ヨナ書の〕著者はヨナに神の本質を“憐みと慈しみ”と描写している美しい文、ヘブライ語聖書中に何度も現れるある中心的神学的確言を引用させます⁹。しかしヨナはその文を大いなる怒りを以て神に投げつけるのです。ヨナにとって、神は余りにも優し過ぎるのです。一話がイスラエルの敵であるニネベの人々のような民となると特にですが！確かにヨナ書の喜劇的効果の一部は、神がニネベの全住民のことで忍耐しなければならぬ以上に、いやいや〔献身〕している自らの預言者のことでより一層の忍耐を余儀なくされている点にあります。そしておまけの軽いジョークとして、ヨナは神のミッションから逃走中に、全く意図せずにはですが、船一艘分の船乗り達がイスラエルの神礼拝へと改宗するのに一役買っていたのです¹⁰。

7 〔訳注〕「主の言葉が再びヨナに臨んだ。『さあ、大いなる都ニネベに行って、わたしがお前に語る言葉を告げよ。』（ヨナ書 3：1-2）」

8 〔訳注〕ヨナ書 4章 2節参照。

9 〔訳注〕神がモーセに顕現する出エジプト記 34章 6-7節「主は彼の前を通り過ぎて宣言された。『主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。』」には神の属性についての自己開示のフレーズがあり、ヘブライ語聖書によく引用されている（民数記 14：18、ヨエル書 2：13、詩編 86：15、103：8、145：8、ネヘミヤ記 9：17他）。その多くは感謝や讚美の文脈における肯定的な引用だが、ヨナ書の著者は大胆にも、憤懣やるかたないヨナが神に怒りをぶつける文脈でその章句をヨナに嫌味として引用させている。「彼は、主に訴えた。『ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。』（ヨナ書 4：2）」

10 〔訳注〕「人々は大いに主に畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた。」（ヨナ書 1：16）

ヨナ書は一貫した喜劇的アイロニー（皮肉）ですが、その効果はまたヨナに対してだけでなく、神の愛を自民族だけに制限していたイスラエルの人々に対しても、人類に対する神の愛の広さを、一つの教訓として表現することにもあります。そのユーモアはまた頑固で、独りよがり、自分のみが常に正しいと確信しているタイプというある種のおなじみの登場人物の描写にも依拠しています。今やヨナは自分の偏見と疑いなき確信の全てが異議申し立てにさらされるという状況下に置かれています。しかしそれでも、神でさえも果たしてヨナに彼自身の精神と姿勢を変えさせることが出来るのかは定かではありません。著者の非凡な才能の片鱗はその書をクエスチョン・マークで終わらせたことにも示されています¹¹。神の愛は全ての人間に一たとえ彼等が誰であろうと何者であろうと一及ぶということをどの程度までヨナは受け入れることが出来たのでしょうか。そして勿論、ヨナを通して、その問いは自らの諸々の確信と偏見に固執している私達読者にも向けられているのです¹²。

〔バト・シェバ事件におけるアイロニー サムエル記下11章〕

アイロニーが事件の苦い悲劇性を特色づけているもう一つの例を見ることにしましょう。ダビデ王はエルサレム宮殿で安全にくつろいでいます。一方彼の軍は遠くで戦争に従事しています（サムエル記下11章）。ある夕べ、王宮の屋上を散歩していた彼は、一人の美しい女性バト・シェバが水浴しているのを目に留めます。彼女が結婚している事を知りながら、彼は彼女を自分の許へ連れて来させ、彼女と共に寝、その後彼女を家へ帰らせます。その後まもなく彼

11 「訳注」ヨナ書は下記の通り神の問いかけで唐突に終了し、ヨナの返答は記されない。この終わらせ方が普遍的に読者の応答に開かれた書としてヨナ書の特異性を際立たせている。「すると、主はこう言われた。『お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。』（ヨナ書4：10-11）

12 ヨナ書のより詳細な文学的研究については Jonathan Magonet, *Form and Meaning: Studies in Literary Techniques in the Book of Jonah* (Sheffield: The Almond Press, 1983) ならびに同著者による *Bible Lives* (SCM Press, 1992), pp.134-148 の当該章を見よ。

は、彼女が身籠ったとの報せを受けます。その子が彼のものであることは明白でした。彼は何とか理屈をつけて彼女の夫ウリヤを戦場から連れ戻し、御馳走をふるまい、彼を妻の待つ家へ帰らせませす。ダビデの目論見は勿論ウリヤが妻と寝て、それによって妊娠問題を解決してくれることにありました。ダビデにとっては恐怖となり、そして多分万事を監視してはそれをダビデに細大漏らさず報告していた宮廷雀にとっては愉快な見物となったと思われませんが、なんとウリヤは帰宅せず、主君の家臣達と共に眠ったのです。何故〔帰宅しなかったの〕か説明するようダビデに求められた時、ウリヤは一見単なる忠実な兵士として話しているように見えます。「私の仲間達は戦場で戦っているのに、どうして私だけが自宅の安楽を求めたり出来るでしょうか？」と¹³。しかし、彼は本当にただの戦士なのでしょう。ウリヤが彼の言葉の最後に「おまけに、私の妻と寝る、などということが」¹⁴と付け加えた時、ダビデは何を感じたのでしょうか。ウリヤは何が進行中か知っていて、ダビデの駆け引きに乗ることをきっぱりと拒絶しているのでしょうか。あるいは彼は本当に何も知ってはならず、戦友達への高度に発達した義務感を持つ騙されやすい兵士に過ぎないのでしょうか。ダビデには知ることが出来ないし、私達読者にも知る術はありません。なりふり構わぬダビデはウリヤをもう一晚留め、彼を酔わせ、再び家に帰らせませす。しかし酒を飲もうと飲むまいと、ウリヤは今度もまた主君の家臣達と共に眠りました。今やダビデは他に選択肢がなくなり、ウリヤが知っていたというまいと、別の解決が必要とされました。そして悲劇的なことに、ダビデは〔彼を〕不法に殺すという選択をします。さらなるアイロニーとして、ウリヤは自らの運命を記した封書を、彼の死を巧みに工作することになる軍の司令官ヨアブへと届けるのです。この話が実際〔の本文で〕物語られる手法は単純でも、中立的でも、客観的記述でもありません。ウリヤの不可解な振る舞いによって高じるダビデのフラストレーションの詳述の中には紛れも無くユー

13 〔訳注〕「ウリヤはダビデに答えた。『神の箱も、イスラエルもユダも仮小屋に宿り、わたしの主人ヨアブも主君の家臣たちも野営していますのに、わたしが家に帰って飲み食いしたり、妻と床を共にしたりできるでしょうか。あなたは確かに生きておられます。わたしには、そのようなことはできません。』」（サムエル記下 11:11）

14 〔訳注〕サムエル記下 11章 11節参照。

モアが存在しています。その物語はダビデを笑いのネタにした深いアイロニーに満ちたものであり、〔息子アブサロムの反逆に象徴される〕彼の悲劇的な権勢失墜の始まりを暗示するものとして、あの退廃〔的事件〕を痛ましく記録しています¹⁵。

〔アイロニーの技法〕

これらの例の両方とも、匿名の語り手達は主人公を笑いのネタにしたユーモアで自らの倫理的物語を織り込んでいます。もし私達がユーモアとしてそれらを分類するとしたら、それらは一般に「アイロニー」と称される範疇に含まれるでしょう。古代ギリシア劇から派生したその術語を定義しようという多くの試みが存在します。ある一つの定義は、私達がこれまでに扱ってきた2つの章句の例によく適合すると思われまます。〔その定義によれば、〕著者達は、ある登場人物の言葉や行為の持つ十分な意味が読者に対しては明白だが、その登場人物本人には認識されていないという技巧を使います。〔何が起こるかをまだ知らない登場人物の抱く〕期待と〔物語の進展で登場人物が体験する〕現実との間にギャップが生じ、こうして読者がその登場人物を笑いのネタにして鑑賞することが出来るのです。ヨナは打ち負かせる筈のない神を相手取って馬鹿げた一戦を交えています。そして彼の怒りは特にアイロニーに満ちたものです。なぜなら彼に挫折感を起こさせ、彼を激怒させているものこそ、意外にも神の優しさだからです。ダビデは彼自身に責任があるところの欺きの罠に複雑さを増し加えつつ自縄自縛に陥っていきます。そしてそこから逃れようとして、ついには彼自身の高潔さまで喪ってしまうのです。

15 ダビデとバト・シェバの物語についてのこの解釈は以下の重要な研究に基づく。M. Perry and M. Sternberg, 'The King through Ironic Eyes: 'The Narrator's Devices in the Story of David and Bathsheba and Two Excurses on the Theory of Narrative Text' *Hasifrut* (1, 1968), pp.263-292 (Hebrew). 英訳版は以下に所収。Meir Sternberg, *The Poetics of Biblical Narrative: Ideological Literature and the Drama of Reading* Chapter 6 'Gaps, Ambiguity and the Reading Process' (Bloomington: Indiana University Press, 1987), pp.186-229.

〔主人公が笑いのネタにされる理由〕

以上のケースは両方とも明白に倫理性が問題となっていました。聖書的ユーモアにはまた特定の人々の行為の不条理さをからかうより軽い側面もあります。大抵の場合笑われるのは主人公達ですが、おそらく彼等自身の目にも、信奉者や後代の読者の目にも、彼等が決して偉くなり過ぎないように保証するためでしょう。しかしこれはまた重要な仕事を実行すべく神によって選ばれる者は、しばしば最もありそうにない人物であるという聖書的パターンの反映でもあります。ヤコブは欠点のある狡猾な人物でしたが、それにもかかわらず神と格闘することを通して、イスラエル—その〔名で呼ばれる〕民族の始祖—となる程に変わることができました。ダビデは、エッサイの息子達の中で最も若く、サムエルによって王として油を注がれるべく選ばれるには、最もありそうにない者でした。実にサムエルといえどもリーダーシップに必要とされる内的資質よりも外見に目を奪われる間違いを犯す余地のあることが示されます¹⁶。ありそうにない、欠陥のある人物が選ばれることによって、私達は何が起こるかを究極的に決定する者は神だけであるということを想起させられます。ですから固定観念に基づく予想を覆すことは聖書的物語のもう一つの様相であり、それは時々ユーモアという手法によって示されるのです。それでは聖書の主人公がつまらないミスを犯す愉快な例を一つ見てみましょう。

〔ギデオン物語にみる軽めのユーモア 士師記6章〕

その物語は士師記のギデオンについてのものです。それは神が天使を媒介して誰かに現れる数ある物語の一つです。これらの顕現物語はある共通の技法を用います。私達読者は何が進行中か知っており、しかしその物語の登場人物は部分的にのみこれを理解しています。そしてユーモアがこの不確実性の中に存しているのです。ギデオンは、私達読者だけはそれが「主の天使」であると分

16 〔訳注〕「彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。しかし、主はサムエルに言われた。『容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。』」(サムエル記上 16 : 6-7)

かっているところの、ある〔謎の〕男と遭遇します¹⁷。ところで、「天使」と訳された単語マルアクは単に「使者」一人間であれ天的存在であれ一を意味します。その男はギデオンに、あなたは民を導きミディアン人との戦争に勝利をもたらすべき者であると言います。天使が彼の前から消えた後もなお、ギデオンは必ずしも確信が持てませんでした。そこでその戦いに先駆けて、彼は神に一つのしるしを求めます。士師記6章36-40節を以下に紹介しますので、ギデオンの間違いを見つけ出して下さい。

ギデオンは神にこう言った。「もしお告げになったように、わたしの手によってイスラエルを救おうとなさっているなら、羊一匹分の毛を麦打ち場に置きますから、〔朝になったら〕その羊の毛にだけ露を置き、土は全く乾いているようにしてください。そうすれば、お告げになったように、わたしの手によってイスラエルを救おうとなさっていることが納得できます。」すると、そのようになった。翌朝早く起き、彼が羊の毛を押さえて、その羊の毛から露を絞り出すと、鉢は水でいっぱいになった。(士師記6：36-38)¹⁸

この時点で、ギデオンはこの事自体が大いなる奇跡でも何でも無いことに思い至ったに違いありません。そもそも、羊の毛は土が乾いた後も長く露を留めるものだからです！ それでギデオンはもう恥ずかしさの余り、傍目にもどぎまぎしながら、もう一度試みます。

17 〔訳注〕「さて、主の御使いが来て、オフラにあるテレビンの木の下に座った。これはアビエゼルの人ヨアシユのものであった。その子ギデオンは、ミディアン人に奪われるのを免れるため、酒ぶねの中で小麦を打っていた」(士師記6：11)。この時点で読者には十分な情報が与えられている。しかしギデオンが男の正体を知るのは22節節のことである。「ギデオンは、この方が主の御使いであることを悟った。ギデオンは言った。『ああ、主なる神よ。わたしは、なんと顔と顔を合わせて主の御使いを見てしまいました。』」(同6：22)

18 〔訳注〕講演者の原稿に従い、〔朝になったら〕を付加してある。

ギデオンはまた神に言った。「どうかお怒りにならず、もう一度言わせてください。もう一度だけ羊の毛で試すのを許し、羊の毛だけが乾いていて、土には一面露が置かれているようにしてください。」その夜、神はそのようにされた。羊の毛だけは乾いており、土には一面露が置かれていた。(士師記6：39-40)

注目して下さい。最初のバージョンでは、蒸発作用の自然法則に従って実際そうなるべきことであるので、本文は単純に「するとそれはそのようになった！」と書いています。しかし二回目のケースでは、そのヘブライ語は「すると神がそのようになさった。」と読めます。それは自然の秩序を逆転するような何らかの神的行為が要求されたことを強調するためなのです。私達は全く何のテストにもなっていないことを求めることで神を試みようとするギデオンの最初の愚かな企てに笑います！そしてその後神が忍耐強く2度目のテストを一たとえそれが神にとっては余りにも微小な奇跡の要求であっても一受け容れる〔のを見る〕時、私達は思わず微笑んでしまうのです。

〔預言書における風刺 イザヤ書〕

この種〔ギデオン〕のアイロニーに満ちたユーモアは実際全く穏やかなものでしたが、しかしアイロニーはそれが風刺 (satire) へと移る時、はるかにより鋭く、辛辣なものとなることがあります。風刺とは、とりわけ政治的文脈において、人々の間抜けさや悪徳を暴露し、批判するために、ユーモア、アイロニー、誇張または嘲りを用いることと定義されます。こうした風刺を込めた攻撃は預言書、特に預言者アモスとイザヤに顕著です。何と言ってもこの種のユーモアの巨匠は、自分の属する社会の指導者層を批判している時の預言者イザヤです。以下の章句でイザヤは破局の時代を、平時なら慣例的な親族間のコネクションを駆使してある指導者的役割を担いたがる筈の人々が、その職責と関わりたがらなくなる時として描写しています。

人は父の家で兄弟に取りすがって言う。「お前にはまだ上着がある。我らの指導者になり／この破滅の始末をしてくれ！」と。(イザヤ書3：6)

このユーモアを味わうためには、以下の事を知っておかなければなりません。ここで「破滅」(文字通りには「よろめき」として訳されているヘブライ語の単語マフシェラー [מַשְׁחָרָה]) は、一文字だけ変えることで得られる「統治」を意味する単語メムシャラー [מַמְשָׁלָה] をかけた言葉遊びなのです。その上更にこの文全体は意外にも事実上高官が新しい誰かに転任される時に使用される公用語のパロディなのです (Cf. イザヤ22：21)¹⁹。英語においては、この言葉遊びは単語 'reign' (統治) が期待される場面で単語を 'ruin' (破滅) に置き換えることによって同等の効果をえられるでしょう。

イザヤは言葉遊びの達人です。彼の有名な譬え話において、ある人が葡萄園を大切に手入れしますが、実ったのは酸っぱい葡萄だけという結果に憤慨した [という次第が語られます]。続いてイザヤはその譬え話を説明します。すなわち、その人とは神のことであり、その葡萄園とは墮落してしまったイスラエルの家のことである [と解き明かすのです]。彼は以下のように締めくくります、「彼 [主] は公正を期待していたのに、見よ、流血。正義を [期待していた] のに、見よ、叫喚」と²⁰。いかなる翻訳もこの密度の濃いヘブライ語本文を真に伝え切ることには出来ません。公正と正義の単語を一文字だけ変えることによって、それら自身が悪い意味を持つ別の単語へと歪められてしまうのです。

19 [訳注] シェブナ罷免を預言するイザヤ書22章の文脈中に官吏交代の手続きに関する描写がある。「わたしは、お前をその地位から追う。お前はその職務から退けられる。その日には、わたしは、わが僕、ヒルキヤの子エルヤキムを呼び、彼にお前の衣を着せ、お前の飾り帯を締めさせ、お前に与えられていた支配権を彼の手へ渡す。彼はエルサレムの住民とユダの家の父となる」(イザヤ22：19-21)。この「衣を着せる」モチーフ(単語としては違う)が3章6節の「上着を持っているじゃないか」に対応している。そして「お前(前任者)のメムシャラー(支配権)を彼(後任)の手の中に」という宣言が3章6節では「このマフシェラー(破滅)をお前の手の下に」とパロディ化されている。

20 [訳注] イザヤ書5章7節参照。

まさしく、それらの単語〔公正と正義〕によって期待される正しい振る舞いが悪い振る舞いへと堕落してしまうのと同じです。

ヴァ・イカヴ

レ・ミシュパート〔מִשְׁפָּט 公正〕 ヴェ・ヒンネ ミスパーハ〔מִשְׁפָּח 流血〕

リ・ツェダカー〔צְדָקָה 正義〕 ヴェ・ヒンネ ツェアカー〔צַעֲקָה 叫喚〕

(イザヤ書5：7)

イザヤは多くの指導者層を攻撃しています。当時の聴衆であれば誰の事を指しているか認識できたでしょうが、私達はただいくつかのケースにおいて推測できるだけです。例えば次のグループは政治家と思われる。

悪を善と、善を悪と言う者。闇を光と、光を闇と言う者。苦いものを甘いと、甘いものを苦いと言う者²¹。

さらに明白なのは顧問や参議です。

知者たる者——但し自分自身の目においてだけ！

そして自分自身の見解においてだけ——賢き者！²²

同様に軍も批判されています。

力強き戦士たる者——但し酒を飲むことにかけてだけ！

そして豪傑たる者——但し強い酒を調合することにかけてだけ！²³

21 〔訳注〕イザヤ書5章20節参照。

22 〔訳注〕イザヤ書5章21節参照。

23 〔訳注〕イザヤ書5章22節参照。

しかし司法組織に話が及ぶ時、イザヤはユーモア〔を用いるというスタイル〕を超えて、直接的な批判へと移るのです。

有罪の者を無罪とする者——但し賄賂で、

彼等はそうやって無実の者からその人達の正義を剥奪しているのだ！

(イザヤ書5：20-23) ²⁴

イザヤと共に、私達はこの種の風刺を込めたユーモアは、ある知識階級に由来するという感じを受けます。恐らくは鋭い機知と洗練された洒落が嗜みとされた宮廷の君主やその助言者達を想定し得るでしょう。

〔家庭におけるユーモア 創世記18章〕

しかし聖書的ユーモアはもっと家庭的な舞台設定の中にもまた見出され得るものです。神とアブラハムとサラ三者間のある対話が好例ですが、時には神さえもそのジョークの中に巻き込まれます。創世記18章において、神はアブラハムに、サラが男の子を産むであろうと告げます。その時点でサラはかなり年を取っており、聖書が指摘するように、出産可能な年齢も過ぎていたので、彼女が笑って「もはやそのような楽しみがあるはずもなし、私の夫も年老いているのに！」と言うのはもっともなことです²⁵。むしろ神は、サラが神の約束を疑っているかも知れないということに立腹したようにみえます。そこで神はアブラハムに「なぜサラは『私は年をとったので、私に子供が生まれるはずがない』と言って笑ったのか！」と言いました²⁶。ラビ達は神が現にサラの言葉を変えていることに気がついていました。サラは「私の夫〔アブラハム〕は年老

²⁴ 〔訳注〕イザヤ書5章23節参照。5章20-23節は講演者による英訳に基づく。

²⁵ 〔訳注〕「アブラハムもサラも多くの日を重ねて老人になっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていた。サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。」(創世記18：11-12)

²⁶ 〔訳注〕「主はアブラハムに言われた。『なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。』」(創世記18：13)

いている」と言ったのですが、神は彼女のことを「私〔サラ〕は年老いている」と言ったものとして〔アブラハムに〕告げています。ラビの解釈によれば、神はアブラハムの家庭内の平和のために、故意に彼女の「私の夫が年を取り過ぎているから」という言明を修正し、すすんで「悪気の無い嘘」(white lie)を吐いてくれたとなります。

〔人間との交渉を喜ぶ神 出エジプト記32章〕

神とモーセの間の対話においては、特に神が民を罰するのを思い止まらせるための論拠をモーセが何とか見出そうと努める時に、面白い瞬間がいくつかあります。一例を挙げましょう。神は金の子牛のエピソードの後でかつてない怒りを発し、山の上でモーセに「直ちに下山せよ。あなたがエジプトの国から導き上ったあなたの民は墮落してしまっている！」と言います(出エジプト記32:7)。しかしイスラエルを弁護しながら、モーセは「どうしてあなたは、あなたがエジプトの国から導き出された、あなたの民に向かって怒りを燃やされるのですか？」²⁷と尋ねます。神は彼等を「モーセよ、あなたの民だろ！」と呼び、モーセは彼等を「〔いいえ〕神よ、あなたの民です！」と呼んでいます。ラビ達が述べているようにそれはまるで自分達の子供が何か悪いことをしてしまった時の両親の罵り合いのようです。しかし分のある主張をしていたのはモーセの方でした。神は〔モーセに〕「あなたがエジプトから導き上ったあなたの民」と言いました。しかしモーセは正しくも、そもそも最初にエジプトから彼等を導き出したのは神である以上、もし彼等を導く事が不可能になってもモーセは殆ど咎められないことを指摘できたのです。モーセに対する神の「私を放っておけ。そうすれば私は怒りで彼等を滅ぼせるから」(出エジプト記32:10)との語り口は、あからさまに、神を放っておくのではなく、介入し、議論せよとモーセを招いている点で、ユーモアさえ感じられます²⁸。これ

27 〔訳注〕出エジプト記32章11節参照。

28 〔訳注〕「今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」(出エジプト記32:10)

に類似したやり方で、神はアブラハムにソドムとゴモラを滅ぼすという神の決定を批判させています²⁹。これらの物語において神と特別な人間のパートナーはある親密な遠慮気兼ねのない関係性を持っています。神は人間との議論に対して大変協力的で開かれており、それどころか神自身の威厳を犠牲にしてもそれ〔議論〕を奨励する方として描かれています。

〔ヘブライ語「ガム」の用法 創世記21章〕

あいにく、ある程度聖書的ユーモアはヘブライ語文自体についての知識に依存しています。例えば、アブラハムはアビメレク王とピコルと呼ばれる彼の軍団長によって訪問を受けます（創世記21：26）。アブラハムはその王の家来達がアブラハムの複数の井戸から水を盗んだことで不平を言います。殆どの翻訳はアビメレクにこう言わせています。「そんなことをした者がいたとは知りませんでした。あなたも〔ガム〕告げなかったし、わたしも〔ガム〕今日まで聞いていなかったのです。」と。そうした訳本は文字通り、そして正確に、ヘブライ語の単語「ガム」を「～もまた」の意味で訳しており、そして単純にそれをアブラハムへのアビメレク王の台詞の一部として含めています。この方法で理解されたその文において、単語「ガム」は実際に冗長に過ぎるくらいがあります。しかしもしその単語「ガム」はアビメレクによって実際に言われた台詞の一部ではなく、その王が自らの意見を二つの異なった人々へ向けて言っていることを示すためのある種の脚本のト書きのようなものであると認識するならば、その章句は俄然活気を帯びて来ます。それ故実際の会話は、アビメレクがアブラハムへ「私は誰がそんな事をしたのか知りません！」と言い、そしてそれから自分の軍団長ピコルへ顔を向け、「お前は私に言わなかったじゃないか！」と〔小声で〕言い、その後、アビメレクは全く無邪気にアブラハムに振り返って「私は今日までそれについて聞いたことが無かったです！」と言う〔、このような流れになるのです〕。それはピコルを犠牲にしての関係否認という政治的能力についての古典的な一例であり、後に続く〔アブラハムとアビメレクの〕交渉の前に置かれたほんの一瞬の喜劇と言えます。

29 〔訳注〕創世記 18 章 16-33 節参照。

[ギャロウズ・ユーモア① 出エジプト記14章]

アイロニーについてのもう一つのバリエーションは、深刻な危険または恐れ
の諸状況の中で生じる場所の「ギャロウズ・ユーモア」(gallows humour) で
す³⁰。以下に一例として出エジプト記14章11節を挙げますが、この同じ文から
多くの読み方が可能です³¹。すなわち、民による怒りと絶望の叫び声として、
あるいは、モーセへの辛辣な攻撃として、または自らの運命へのある種の苦い
アイロニーに満ちたジョーク[ギャロウズ・ユーモア]として[解釈可能です]。
[しかし、]ヘブライ語における単語の順序は、平叙構文を逆転させて、その
文頭に持って来た単語群に特別な強調を置く形となっており、[その強調語順
は]ギャロウズ・ユーモアがここでの基本モードであることを暗示しています。
エジプトから脱出したイスラエルの人々でしたが、ファラオの軍が彼等を追跡
し、いよいよ接近しています。彼等の前には渡航不可能な海があります。彼等
はモーセに向かって言います。

ハ・ミツベリ エイン-ケバリム ベ・ミツライム

レカハターヌ ラ・ムート バン・ミドバル?

全くなかったのですか? エジプトには墓[の空き]が

我々を荒れ野で死なせるためにわざわざ連れ出してくれたようですけ
ど?! (出エジプト記14: 11)

30 [訳注] 竹林滋他編『新英和中辞典 第7版』(研究社, 2003), 736頁によれば、ギャ
ロウズ・ユーモアとは「非常に深刻な事態をちやかすようなユーモア」を意味する。ま
た *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm Bd. 4* (München: Deutscher
Taschenbuch Verlag, 1984), Sp. 1175によれば、ドイツ語の同義語 Galgenhumorの定義は
「自暴自棄のユーモア、元来有罪判決を受けた者が絞首台の横木の下にいる時に口を
ついて出てくるもの」である。“絞首台 (gallows) のユーモア (humour)”という文字通
りの文脈に関する限り、日本語で並行するのは「引かれ者の小唄」(その英訳は bravado
「虚勢、強がり」) であるように思われる。しかし、本講演におけるギャロウズ・ユー
モアは決して bravado に関するものではなく、死の究極的な瞬間に直面している時に些
細な事について心配することの不条理に関するものである。

31 [訳注] 「また、モーセに言った。『我々を連れ出したのは、エジプトに墓がない
からですか。荒れ野で死なせるためですか。一体、何をするためにエジプトから導き出
したのですか。』」(出エジプト記 14: 11)

ここにはその〔ギャロウズ・〕ユーモアがはっきりとその文が実際に言われたその仕方〔ヘブライ語本文の強調語順〕に依存しています。

〔ギャロウズ・ユーモア② サムエル記上21章〕

もう一つの例はサムエル記上21章です。ダビデはサウル王の前から身を隠し、ガトを支配するペリシテ人の王、アキシユの許へやって来ます。王の家臣達に敵と識別されるに及んで、ダビデは絶体絶命の危機に陥ります。

サムエル記上21章12-16節（新共同訳）

アキシユの家臣は言った。「この男はかの地の王、ダビデではありませんか。この男についてみんなが踊りながら、『サウルは千を討ち、ダビデは万を討った』と歌ったのです。」ダビデはこの言葉が心にかかり、ガトの王アキシユを大変恐れた。そこで彼は、人々の前で変わったふるまいをした。彼らに捕らえられると、気が狂ったのだと見せかけ、ひげによだれを垂らしたり、城門の扉をかきむしったりした。アキシユは家臣に言った。「見てみろ、この男は気が狂っている。なぜ連れて来たのだ。わたしのもとに気の狂った者が不足しているとでもいうのか。わたしの前で狂態を見せようとして連れて来たのか。この男をわたしの家に入れようというのか。」

16節のアキシユ王の台詞は、〔語順が〕逆転されているヘブライ語の〔強調〕構文になっており、その中にある種のユーモアを確認できます。

ハ・サル メシュガイム アニ？

キー-ハベテム エト-ゼ レ・ヒシュタゲア アライ？！

私は自前のメシュガイム（「気が狂った者」—新共同訳）に不足しているのか？

私の前でヒシュタゲア（「狂態を見せる」—新共同訳）のためにわざわざこいつを連れて来たようだが？！

ラビ達はこの物語の隙間を埋めようと努め、以下のように解釈しました。

Now the daughter of Achish and her mother were both mad, and the two were screaming and carrying on in madness within, while David was screaming and playing at madness without. (The Midrash on Psalms 34:1)³²

「アキシユの娘とその母は、両者とも^{マッド}madであり、二人は金切り声をあげ、^{マッドネス}madnessを続けていた。一方ダビデは金切り声をあげ、外部^{マッドネス}でmadnessを演じていた」³³

〔知恵文学におけるユーモア 箴言26章〕

ユーモアに関するもう一つの領域はいわゆる知恵文学です。以下に、その〔格言の〕隙間を埋めるためにラビ的注解から少々手助けしてもらいつつ、怠け者の学生の〔目に映る〕世界についての一つの洞察をご鑑賞下さい。

「怠け者は言う／『道に獅子が、広場に雄獅子が』と。」(箴言26:13) ソロモン〔伝統的に箴言の「著者」と理解されてきた〕は私達にその怠け者についてこう言う。彼等〔人々〕が彼〔怠け者〕に「あなたの師があの都にいる。行って彼からトラーを学べ」と言うと、彼は「私はその道にいるあの獅子を恐れている！」(箴言26:13a)と返答する。そして彼等が「ほらご覧。あなたの師は町内のごく近くにいる。起きて、彼の許へ行け」と言うと、彼は「私はその広場に雄獅子が一頭いた場合を恐れている！」(箴言26:13b)と彼等に言う。彼等は彼に言う、「見よ、彼〔師〕はあなたの家のすぐそばに住んでいる」。彼は彼等に言う、「しかし外には雄獅子がいる！」(箴言22:13)。彼等は彼に言う「彼はお前の家の中にいる！」彼は

32 〔訳注〕 William G. Braude (trans.), *The Midrash on Psalms 1* (New Haven: Yale University Press, 1959), p.410.

33 〔訳注〕 このような笑いは現代では問題を含んだ不適切なものであるが、歴史的文学中における笑いを考察する本講演の性質上敢えてそのまま引用している。

返答する。「しかし私が〔その師のいる部屋まで〕行っても、そのドアに鍵がかかっていたらどうなるだろう！」とうとう何と返答すべきか分からなくなって、彼は彼等に言った。「そのドアに鍵がかかっているといまいと、私はもうほんのちょっとだけ眠りたいのだよ！」(申命記ラッバー 8 : 6)

箴言が後述しているように、「怠け者は鉢に手を突っ込むが／口にその手を返すことをおっくうがる。」のです。(箴言26 : 15)

〔ハマン エステル記6章〕

さて、この講演のタイトルにおける問い〔「ヘブライ語聖書に、なぜユーモアが存在するのか？」〕に取り掛かる前に、私は最後にもう一つの聖書の物語に登場するユーモアの例を付け加えてみます。エステル記6章がそれですが、この特別な章句はその構成の輝かしさを鑑賞するためにステージで実演してもらう必要があります³⁴。エステル記はペルシャ時代に舞台が設定されており、アラビアンナイトの架空のファンタジー物語のように読むものです。エステルと呼ばれる一人のユダヤ人女性が、自らのユダヤ人としての出自を隠してですが、王妃になります。彼女の後見人モルデカイは宮廷の官吏ですが、偶然アハシュエロス王に対する暗殺計画を知り、これにより王の命は救われます。しかしモルデカイは、王国の最高位についたハマンの怒りを買います。ハマンはモルデカイと全ユダヤ人の殺害を計画し、その許可を得るために、王に大金を〔国庫に〕納め〔ることを請け合]います。エステル記全体を通して、私達はこの王が他人に操られる愚鈍な人物なのか、あるいは潜在的競争相手同士〔ハマンとモルデカイ〕を操作することで権力に留まろうとするどこか抜け目ない人物なのか判別がつかえません。前章〔エステル記5章〕の終わりでハマンはモルデ

34 〔訳注〕講演会では俳優の柴田和雄氏（「九州小劇場」所属、平尾バプテスト教会員）によるエステル記6章の朗読劇が行われた。これは本論2頁「日本の言語と文化の中で、この特殊な講演が受容されるかという…難題に直面」した講演者のたつての希望に平尾教会演劇ミニストリーが応じる形で実現したものである。大変好評であった。ご協力を改めて感謝したい。

カイを吊るす計画に基づき絞首台を立て、そのことを進言しに王の許へ向かっているところで〔6章が始まりま〕す。お聞き頂きたいのは、この章〔エステル記6章〕にはある特別なフレーズが6回、しかし毎回違う意味を以て繰り返されるその妙味です。この繰り返しは、いかにしてハマンのプライドが彼自身に、自らこそ“王が榮譽を与えることを望む者”に他ならないと想像させ、誰かに自らを高らかに称讃させながら町中を闊歩する己自身のイメージに酔いしれさせたかについて、私達の理解を容易にしてくれます。しかしその後、王は、この事をユダヤ人モルデカイーハマーンが折しも殺す計画を立てていた最も憎むべき敵一に対してするようにとハマーンに命じることによって、彼が膨らませた幻想を一瞬で木っ端微塵に打ち砕きます。結局ハマーンは、自分のことだとばかり思っていた例のフレーズ〔“王が榮譽を与えることを望む者”〕をモルデカイのために呼ばわりながら町中を練り歩かねばなりません。どの口でその台詞を言えたのでしょうか。私達は彼自身のプライドが現実に彼を破滅させる有様に笑いを誘われるのです。

その夜、王は眠れないので、宮廷日誌を持って来させ、読み上げさせた。そこには、王の私室の番人である二人の宦官、ビグタンとテレシュが王を倒そうと謀り、これをモルデカイが知らせたという記録があった。そこで王は言った。「このために、どのような榮譽と称賛をモルデカイは受けたのか。」そばに仕える侍従たちは答えた。「何も受けませんでした。」王は言った。「庭に誰がいるのか。」ハマーンが王宮の外庭に来ていた。準備した柱にモルデカイをつるすことを、王に進言するためである。侍従たちが、「ハマーンが庭に来ています」と言うと、王は、「ここへ通せ」と言った。ハマーンが進み出ると、王は、「**王が榮譽を与えることを望む者には、何をすればよいのだろうか**」と尋ねた。ハマーンは、「**王が榮譽を与えることを望む者は自分以外にあるまい!**」と心に思ったので、王にこう言った。「**王が榮譽を与えることをお望みでしたら、王のお召しになる服を持って来させ、お乗りになる馬、頭に王冠を着けた馬を引いて来させるとよいでしょう。それを貴族で、王の高官である者にゆだね、榮譽を与えることをお望**

みになる人にその服を着けさせ、都の広場でその人を馬に乗せ、その前で、『王が榮譽を与えることを望む者には、このようなことがなされる！』と、触れさせられてはいかがでしょうか。」王はそこでハマンに言った。「それでは早速、わたしの着物と馬を取り、王宮の門に座っているユダヤ人モルデカイに、お前が今言ったとおりにしなさい。お前が今言ったことは何一つおろそかにしてはならない。」ハマンは王の服と馬を受け取り、その服をモルデカイに着せ、都の広場で彼を王の馬に乗せ、その前で、「王が榮譽を与えることを望む者には、このようなことがなされる！」と、触れ回った。モルデカイは王宮の門に戻ったが、ハマンは悲しく頭を覆いながら家路を急いだ。彼は一部始終を妻ゼレシュと親しい友達とに話した。そのうちの知恵ある者もゼレシュも彼に言った³⁵。「モルデカイはユダヤ人の血筋の者で、その前で落ち目になりだしたら、あなたにはもう勝ち目はなく、あなたはその前でただ落ちぶれるだけです。」彼らがこう言っているところへ、王の宦官たちがやって来て、エステルの催す酒宴に出るよう、ハマンをせきたてた。(エステル記6：1-14)

ヘブライ語聖書に、なぜユーモアが存在するのか？

何故ヘブライ語聖書の中にはユーモアが存在するのでしょうか？ 聖書それ自体はユーモアの本質についての論文を全く含んでいませんので、これは私達が決して答えることのできない問いです。私達が最も近づき得るユーモアにつ

35 [訳注] 新共同訳は「知恵ある者」に「そのうちの」の語を加え「そのうちの知恵ある者」と訳すが、ヘブライ語本文は単に「彼の知恵ある者達」(ハハマーヴ)であり、「そのうちの」は本文にはない。新共同訳の解釈では、「知恵ある者」は「(ハマンの) 親しい友達」の一部であり、苦境に陥ったハマンをなお見捨てない友情に厚い人々である。しかし講演者によれば、このヘブライ語ハハマーヴは文字通り 'his wise men' 「彼の知者(ハハム) 達」と訳すべきであるという。なぜなら13節には以下のようなアイロニーに満ちたユーモアが込められているからである。すなわち、ハマンが「一部始終を妻ゼレシュと親しい友達とに話した」ことにより、「親しい友達」は彼の許を去ってしまい、結局ハマンの周囲に残ったのは自分の妻と、「彼の知者達」だけだったというのである。ここでの術語「知者」(ハハム) は高官ハマン付きの助言者を意味する。彼等は職務上ハマンの許から立ち去るわけにはいかなかったのである。

いての説明は「コヘレトの言葉」の中にあります。それは全ての事には時と旬があるという言葉と「泣くべき時があり、笑うべき時がある」（コヘレト3：4）です³⁶。コヘレトが人間の笑いについて叙述しているとすれば、詩編の作者達は、神もまた笑うものであると考えました。しかし彼等は辛い苦難の体験を余す所なく書き表し、自分達のために介入してくれることを神に熱望した人々です。それ故彼等にとって神の笑いは、自らの転落がまもなく来ることを悟ろうともしない強国や邪悪な人々の傲慢さを辛辣に嘲る笑いでした（詩編2：4、37：13、59：9）³⁷。しかし私達がここまでで学んできた神のユーモアについての諸例は、アブラハムやモーセとの遠慮気兼ねのない会話の中にも、ヨナやギデオンへの忍耐強い応答の中にも垣間みられるものでした。これらの例において、神はより一層人間くさく、しかし権威を失うことなしに、近づきやすい存在になっています。おそらく、聖書の世界から時間的にも空間的にも遠く隔たった現代の私達にせいぜいできることは、ユーモアの存在を認め、それが私達読者に対して及ぼす効果を理解しようと企てることだけです。

もう一度私達が熟考してきた諸例を振り返ってみて下さい。ヨナ書は聖書の預言の通常の約束事を逆転させています。読者として、私達は自動的にヨナを物語の英雄（的主人公）と同定しますが、彼の諸々の姿勢の幼稚さについて〔いやでも認識させられますし〕、また通常私達が敵であると看做しがちな人々―つまりニネベの人々―や、私達自身の関心と配慮の埒外にある人々―つまり頼もしく敬虔な船乗り達―に対して惹き起こされた共感についても認識することを余儀なくされるのです。ヨナの愚かさを笑うことへと、そして〔結局ヨナは英雄（的主人公）ではなかったという認めたくない事実を〕悔やみつつ認めることへと招かれることによって、私達は、“自分達とは違う〔連中であ

36 〔訳注〕「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」（コヘレトの言葉3：1）「泣く時、笑う時／嘆く時、踊る時」（同3：4）

37 〔訳注〕「なにゆえ、地上の王は構え、支配者は結束して／主に逆らい、主の油注がれた方に逆らうのか。『我らは、枷をはずし／縄を切って投げ捨てよう』と。天を王座とする方は笑い／主は彼らを嘲り 憤って、恐怖に落とし／怒って、彼らに宣言される。」（詩編2：2-5）「主は彼を笑われる。彼に定めの日が来るのを見ておられるから。」（同37：13）「しかし主よ、あなたは彼らを笑い／国々をすべて嘲笑っておられます。」（同59：9）

る]”とか、“外国人である”とか、または“[自分達を]脅かしつつある〔存在である〕”とさえ決めつけているところの諸々の他者に対する自らの姿勢の一つ一つを再考するよう迫られるのです。ユーモアは何千もの真面目な授業や説教よりも遥かに効果的に、また記憶に残るように、真実を伝えることが出来るのです。

イザヤが私達に思い出させてくれるのは、ユーモアは権力者の自惚れや愚劣さを攻撃し、彼らの墮落の本質とそれが他者に及ぼす損失とを指摘するための一つの政治的なツール（道具）足り得ることです。闇の時代にあっては、ユーモアは私達を意のままに操ろうと企む者に抗する秘密兵器にも〔なり得ますし〕、他の全ての自由が私達から剥奪される時代が来たとしても、なお私達は考えること、嘲ること、そして希望することに関しては自由であるということを出させてくれるものにもなり得るのです。

ダビデとバト・シェバの醜聞におけるユーモアは、起こっている事件に伴う強い嫌悪感を和らげてくれる一方で、一私達の主人公が自分自身の権力の誤用の帰結として自縄自縛に陥っていくその一部始終を私達は観ているので、一また痛ましくもあるものです。多分このケースにおいてはシャーデンフロイデ (Schadenfreude) の要素さえあります。〔それは〕他者の不幸を目撃した時に訪れるひそやかな愉快さ〔を意味するドイツ語で〕、特にその不幸がなければ私達が羨望の対象としていたかも知れない人物〔の転落に対して湧く恥ずべき喜びの感情です〕。〔これと〕著しい対照をなして、ギデオンのケースは、神を試みるという彼の愚かな企てと、その試みを受け容れ完遂してくれる神の忍耐強い意欲とを私達が楽しめる程に、単純に面白く愉快なものです。

エステル記におけるハマンの転落物語は明らかにより陰鬱なトーンです。その書は全体として、王の一見気まぐれに映る行為の上に自らの命運がかかっている捕囚地におけるイスラエルの生活の危うい状態を描写しています。満足げに私達はハマンが自らやり過ぎて失敗し敗北する様を見物することが出来ます。しかし、同時に私達は、〔現実の〕ユダヤ人の歴史にはこのような〔窮地から救われてハッピーエンドとなる〕事例などいかに稀であったかを知るの

す。聖書に登場するイスラエルはその劇的な—しばしば悲劇的な—歴史にサバイヴ（生存）する中で驚くべき弾性に富んだ回復力を示してきました。だからこそユーモアが、〔そして〕しばしば自虐が、〔さらには〕ギャロウズ・ユーモアさえもが、サバイバル・テクニクとして機能してきたのかも知れません。ユーモアは癒すことは出来ませんが、それは一時的な安堵と慰めを与えることは出来るのです。

私達が〔本講演で〕見てきた章句群に顕著なモード（様態）はアイロニーのそれでした。それらの本質にあるのは、人間の失望と私達の実際に成し遂げられる事との間の隔たりです。将来に対する私達の希望と幻は、絶えず自らの限界性の現実と人生の移ろいに直面します。聖書の世界において、この人間ドラマは神の摂理の前で起こりますので、そこでは人間が自己の利害や関心ばかり追求していることと、神が全ての人に及ぶ正義と憐みの実践を要求していることとのコントラストが浮き彫りにされます。人間は神の期待に応えようとしても失敗するという点については、預言者的警告によって強く力説され、聖書の歴史によっても裏付けられているものですが、失敗が私達にもどうやら避けられそうにない事態に直面する時、私達は失望と諦めに陥るしかありません。それ故おそらくユーモアは直近の打撃から回復し、ある種の人生に対する展望を取り戻すための時間を私達に与えてくれる必要な解毒剤なのです。何はともあれ、ユーモアは、たとえ束の間でも、無力さを“私達は自らの運命を意のままに操るなんらかの手段を持っているのだ”という幻想へと変換してくれます。ユーモアは、良い時には私達に人生の恵みを祝うよう促してくれる神からの授かり物です。悪い時には、それでもなお希望への小さな出入口を提供してくれるかも知れません。〔ですから〕ユーモアは当然ヘブライ語聖書の中に見出されることになっているということは何ら驚くべきことではないのです。むしろ、もしユーモアがヘブライ語聖書の中に見出されることになっていないのだとしたら、それこそが恐怖に満ちた損失でありましょう。